

深紅に沈む

夏祭りに行きたかった。

母の作ってくれた着物を着て、がま口の財布を持って。あちこちに並んだ屋台を眺めて、たまにかき氷とかを食べたりして。

そうやって、夏を有意義に過ごしてみたかった。

「裕介、ご飯の時間だって」

母の声を覚ます。固めのベッドで寝がえりを打つと、スプリングが小さく軋んだ。仕切りカーテンの脇から顔を出した看護師さんは、ベッドに備え付けられたテーブルに、お昼ご飯を置いた。

「祐介くん、今日は七夕献立だよ。早く良くなって、夏祭りにも行けるようになろうね」

おもむろに体を起こす。置かれたメニューは、星形の具材が載せられたそうめん、野菜の和え物、星形のゼリーだった。看護師さんにお礼を言うから、手をつける。傍らで母はお茶の用意をしてくれていた。

「夕飯にはスイカが出るからね、楽しみにしててね」

そう看護師さんに言われて、そうめんを啜っていた祐介の顔がパツと輝いた。母がふふつと笑う。

「祐介くん、スイカ大好きですもんね。ちよつと大きめの、こつそりもらっておきますね」

「あらそんな。ありがとうございます」

看護師さんが病室をあとにすると、母は購買で飲み物を買うと行って出て行った。祐介はひとり、食事を続けた。

そうめんは、ずいぶん薄味だった。ゼリーも甘さ控えめで、美味しいけど、

あまり食べた気がしなかった。

祐介は歩けない。生まれつき体が弱く、一度病気をすると長いこと引き摺った。毎年毎年、免疫が弱くなりがちな夏は、病院で過ごした。小学校の宿題は病院で出来るし、友達も見舞いに来てくれる。中庭の散策や院内のイベントにも参加出来た。

けれど、外出許可だけはなかなか下りなかった。特に、人の多い縁日のようなところは。祐介の自宅の近くには大きな神社があって、その参道では例年、規模の大きな夏祭りが開かれる。そこに、祐介はどうしても行きたかった。母に手を引かれて、参道を歩きたかった。

でも、叶わない。

車椅子では、母やほかの人の迷惑になると、祐介は知っていた。

「祐介くんもお祭り行きたいの？」

消灯時間の少し前。隣のベッドで横たわる和美ちゃんが、漫画雑誌を読みながらそう聞いてきた。和美ちゃんは祐介より二つ年上。心臓の病気で、ここにいる。

「行きたいよ。でも歩けないし、外も出ちゃいけないって先生が」

祐介は答えた。母や看護師さんには素直になれないが、和美ちゃんに対してなら何だって言えた。どんな相談も出来た。和美ちゃんと話していると、心が落ち着いて、優しい気持ちになるのだ。

「大丈夫だよ。良くなれば、きつと行けるよ」

にっこりと笑った和美ちゃんの顔は爛れていた。心臓の病気で免疫が弱まって、皮膚病にかかったからだと本人は言っていた。和美ちゃんは笑ったまま体を起こすと、ベッド脇の引き出しから何かを取り出した。それは、赤い

石だった。

「あげるよ」

「何？ これ」

伸びてきた手から、素直に石を受け取る。楕円形の石にはヒモ通し用の穴が一つ開いていて、蛍光灯の光に照らすと、夕暮れのような赤がキラキラと光った。

「お守り。早く祐介くんの病気が治りますようにって願いを込めたの。良かったらもらって」

そう言って、和美ちゃんは笑った。しばらく二人でおしゃべりを続けたが、祐介はいつの間にか眠りの世界へと落ちていた。

□ □ □

祭囃子が聞こえた。

気づいたときには、祐介は、薄暗い森の獣道に一人、ぼつんと佇んでいた。立っていた。

その事実に関心は追いつかなくて、頭の奥がキンとした。ようやく足を動かしてみよう。動く、動く。ゆっくり歩いてみる。いつもは痛みでロクに動かせもしない足が今、しっかりと地面を捉え、蹴っていく。

疑問を押し退けて、歓喜が小さな体を満たす。スキップするように軽やかに歩く。思い通りに足を動かせることは、これほどまでに素晴らしいのか。祐介の顔が、自然に綻んだ。

森を抜けた。そこは神社の参道だった。薄暗い中に、しみじみと佇む社が見えた。何より驚いたのは、そこで縁日が行われていたことだ。

「お……お祭り？」

赤い提灯の明かり。屋台に灯るのは優しい白熱電球。わたあめ、ヨーヨー釣り、クレープ屋などが並び、射的の前に子供たちの列が出来ている。参道は人で溢れていた。

よく見たら、祐介は浴衣を着ていた。母が作ってくれて、いつも着ることのできなかつた可愛いトラ柄の浴衣。母手作りのがま口の財布も首から下げて、頭には、クマのお面が乗っている。

祐介の体は喜びでいっぱいになった。

ずっと来たいと思っていたお祭り。来ることはできないと思っていたお祭り。ずっと、楽しみたいと思っていた。

それが今、目の前に。

祐介の瞳は、お祭りの明かりで光り輝いていた。

「祐介くん」

人混みの中から、自分を呼ぶ声が飛んできた。じっと目を凝らすと、お面をつけてこちらを向いている少女の姿が見えた。誰だろう、と思っていると、少女はおもむろにお面をずらした。

「か……和美ちゃん」

花のような笑顔、きれいな顔立ち、白い肌で余計に目立つ、皮膚の爛れ。毎日隣で顔を合わせている和美ちゃんに間違いなかった。祐介は和美ちゃんの元へ駆け寄った。

「お祭りによこそ、祐介くん」

ピンクのアジサイ柄の甚平を揺らし、和美ちゃんはコロコロと笑った。

「今日ようやく外出許可が出たのよ。嬉しかったから、祐介くんも連れてきちゃった。よかったら、一緒に回ろ？」

わけが分からないまま、祐介は頷いた。楽しそうな笑顔を見ていたら、もう疑問なんてどうでもいいな、と思った。とにかく、せっかく来られたお祭

りを楽しもうと思ったのだ。

和美ちゃんは、祐介の手を引いた。その手の冷たさに首を傾げる。和美ちゃんの手は、いつも焼けるように熱いの。

□ □ □

はっ、と目覚めた場所は、病院だった。

白い天井を、長いこと呆然と見つめていた。そして、あれは夢だったのか、と酷く肩を落とした。

ああ、せつかく行けたお祭りだったのに。

睨むように窓の外を見つめた。曇天は、まるで自分の心を模したかのようだった。

ひとつ、変わったことがあった。隣のベッドの和美ちゃんが、いなくなっ
てしまった。

和美ちゃんのベッドはすっかり片付いていて、どうやら自分が寝ている間にどこかに移ってしまったらしい。看護師さんに聞いても、どこか寂しそ
うに、

「別のところへ行っちゃったのよ」

と言うだけだった。どこの病院なのか、家はどこなのか、尋ねてみたけど
どれも答えは返ってこなかった。

挨拶もなしに行くなんて、と怒りが沸いたが、怒りより寂しさが勝ってい
た。そして、また夢で会えるのではないかと、ふと思った。

祐介は、夕食に嫌いなおかずが出てても文句を言わずに食べ、さっさとベッ
ドに潜って眠ってしまった。その様子を、母は目を見開いて見つめていた。

同じ参道。

同じ屋台。

ふりふりポテトをつまみながら、祐介は和美ちゃんに問うた。

「和美ちゃん、どこ行っちゃったの？」

和美ちゃんは「とつても遠いところ」と悲しそうに言った。大きな瞳に、
深い影が落ちた。

「黙って行っちゃうなんて酷いよう」

「ごめんね、急だったから」

その代わり、時々こうやつてお喋りして、お祭り行こうね、と和美ちゃん
は言った。その笑顔は、いつもの明るさを取り戻していた。

遠くで、子供たちの笑う声があった。

夢と現実を行き来する日々が続いた。

和美ちゃんは毎日、夢に現れた。ヨーヨー釣りをしたり、射的をやったり、
屋台でたこ焼きを買ったりするのはとても楽しかった。夢は少しずつ進んで
いるようで、太鼓の演奏があったり、盆踊りの舞台が組まれていたりして、
飽きなかった。夜になるのが楽しみになった。投げ出したくなるほど嫌だっ
たりハビリも、そこまで嫌ではなくなった。何より、リハビリを頑張って歩
けるようになったら、和美ちゃんの所まで、自分の足で行けるのだ。それが
楽しみでならなかった。どこかで暮らしている和美ちゃんの元へ走って行っ
て、びっくりさせたかった。びっくりした和美ちゃんの顔が目に見えなくて、
祐介は喉の奥で笑った。

□ □ □

その日は朝から雨だった。蒸し暑い空気が、病院を包んでいる。日が沈むと、院内は余計にじめじめした。

購買に行く途中、ナースステーションで看護師さんがひそひそ話をしているのを祐介は見つけた。盗み聞きをするつもりはなかったが、何となくその横を通りづらくて、死角になる廊下に隠れた。

「あのお母さん、大丈夫かしら。ちゃんとお葬式あげてくれるかしら」

「ああ……和美ちゃんのお母さんね。あげてくれるといいけどねえ……病院に入れる時大変だったじゃない。『穀潰しのくせに、病気をするなんて何様だ！』って」

「責任転嫁もいいところですよ。先天的な病気なのに、子供のせいにするだなんて」

「ほんとよ。おまけにあのお母さん、和美ちゃんのお見舞いに一度も来なかったじゃない。虐待して、女の子の顔にあんな火傷痕まで残しちゃって」

「それで少しも自分が悪いって思わないんだから、大したものだわ」

「和美ちゃんが亡くなってせいせいしてたりしたら、あの母親に必殺の右ストレート食らわせてやりたいです！」

廊下に、看護師さんの笑い声が響いた。祐介は、唾然として廊下を見つめていた。看護師さんの声が、エコー付きで頭を廻った。こっちは右ストレートを食らったようだった。

和美ちゃんは——死んじゃった？

祐介はそうつとその場を離れると、全速力で車椅子を漕いで、来た道を戻

った。廊下を通った看護師さんの注意は耳に入らなかった。廊下の手すりや他人の車椅子にぶつかりながら病室に飛び込む。窓際に来ていた鳥が、びっくりしたかのように飛び立っていった。

倒れこむように自分のベッドに飛び込んで、頭まで布団を被った。弾んだ息を整えるように深く息を吸い、冴えた瞳を無理やり閉じた。逸る鼓動も抑え、ひたすら眠りに没われるのを待った。ただ、和美ちゃんに会いたかった。それだけだった。

□ □ □

お寺の境内だった。

盆踊りの舞台のスピーカーから、楽しそうな音楽が流れている。屋台から香ばしい香りが流れていた。ただいつもと違うのは、お祭りには誰も人がいないというところだ。

「和美ちゃん！」

呼んでみるが、返事はない。人っ子一人いない参道を歩いて、早歩きになって、やがて、祐介は駆け出した。たくさんの香りが流れていく。たくさんのBGMが流れていく。それでも和美ちゃんの姿は見えない。草履の鼻緒が食い込んでも、石畳に足を取られて転んでも構わなかった。ただ、ただ和美ちゃんに会いたかった。会って話したかった。死んじゃってなんてないと、言っただけだった。

そして、辿り着いたのは社だった。

転んだせいで浴衣はボロボロ、鼻緒も両足切れてしまった。膝から血も出ている。でも夢だから痛みはなくて、ただ和美ちゃんに会いたい一心で、お

寺の中に駆け込んだ。

そこに和美ちゃんはいなかった。

中は埃だらけで、祐介はガツカリして、踵を返そうとした。しかし、近くの棚に赤い何か光ったのを見逃しはしなかった。祐介が駆け寄ると、それは尚一層輝きを増した。

「これ……和美ちゃんの」

あつたのは、和美ちゃんが祭りの夢の直前にくれたお守り石だった。じつと見つめ、恐る恐る手に取る。途端に、目も開けていられないような眩しさに襲われた。ぎゅつと、赤い石を握りしめる。この世界が、どこか遠くに行つてしまうような感覚が、ゆっくり体を包んだ。

「祐介くん」

聞き覚えのある声に呼ばれて、勢いよく目を見開いた。目の前にいたのは、紛れもない和美ちゃん本人だった。さつきまでいた社ではなく、祐介たちは真つ白い空間に、浮きもせず沈みもせず漂っていた。目がチカチカした。

「祐介くん、もうお別れだよ」

喉から自然と「何で？」という声が出た。お別れしたくなかった。認めたくない、和美ちゃんと別れなければいけないだなんて。

和美ちゃんはゆっくりと手を持ち上げ、祐介の手を指さした。

「？」

「そのお守りは、『核』なの」

「か、かく？」

脳内で変換が出来なかった。戦争とかで使う核って字、と言われ、背筋が凍った。和美ちゃんは嘔き出した。

「そんな危ないものじゃないよ。私の夢と祐介くんの夢を繋ぐのに必要なもの、って意味。祐介くん、お祭り行きたいって言ってたから」

和美ちゃんはとても悲しそうだった。でも、どこか吹っ切れたようだった。「なんでそんなことが出来るの？」

「私、死んじゃったから」

しん……と、世界が静まった。祐介も、あまりにも直球すぎる告白に、言葉を失った。心が凍り付いてしまったかのように寒い。

「私ね、虐待されてたの。ママからいつつも殴られてて、この顔も、ほんとは皮膚病なんかじゃなくて、火傷のあとなの」

驚いて、和美ちゃんをじつと見つめた。目が合うと、彼女は優しく微笑んだ。その瞳には、光がなかった。

ずっと虐待されていた和美ちゃん。

病気で病院に入れて、正直ホツとしているらしい。母に殴られなくて済むから。

和美ちゃんは、そうつと自分の肌に触れた。その痛々しさに、胸が詰まる。その悲しい気持ち伝わってくる。和美ちゃんが一番近くにいる、それに気づけなかった自分が何だか腹立たしかった。下唇を噛み締めると、鈍い痛みが伝わった。

「神さまが、死んじゃった私の願いを一つだけ叶えてくれたの。お別れも出来なかった祐介くんに会いたくて」

私、ずっと幸せになれなかったから、と言う和美ちゃんの頬に、涙が伝った。小さな涙は頬を滑り落ち、空気中にパツと弾けた。その様子がとても輝かしくて、祐介はついつい見惚れてしまった。

和美ちゃんが近づいてきた。その辛そうな顔を見て、もうこれで最後だ、と思った。体が強張る。息が苦しくなる。

目の前で歩みを止める。その体が、だんだん不確かなものになっていく。向こうの真つ白い空間が透けていく。

祐介の瞳から、大粒の滴がこぼれた。

「ばいばい祐介くん。大好きだったよ」

和美ちゃんの、いつもと変わらぬ優しい笑顔だった。そして、和美ちゃんと祐介の唇が触れるのと同時に、この世界は終わりを迎えた。強い力に引つ張られ、現実の、小さな病院の、小児科のベッドの上へ、祐介は戻された。さつきまであったはずの真つ白い世界は姿をなくし、今目の前に広がるのは無機質な天井のみだ。

祐介は、ずっと身に着けていた石をしつかり握りしめた。それは、火傷しそうなほど熱を帯びていた。しかし数分もすると、石は砂のように粉々に砕けてしまった。風でどこかに散らばってしまう赤い砂たちを、祐介は長いこと呆然と見つめていた。

□ □ □

肌を刺す暑さが、人々の心を掻き乱す季節。

一人の青年が、墓地を歩いていた。その足取りは覚束なく、足を庇うようにフラフラ歩いていた。手に持った花と水桶に引つ張られているようだった。

やがて、青年は一つの墓の前に止まって、しゃがみ込んだ。手を合わせて、一つ、息を落とす。

「——歩けるようになったよ、和美ちゃん。遅くなっちゃってごめんね」

青年は、線香に火をつけ、墓の前に置いた。紫煙が真つ青な空へ昇っていく。ここに眠る彼女を弔うかのように。

「……僕も、大好きだよ。今でも、和美ちゃんが大好きだよ」